

「変化の受容と人間観」・ 私の思考遍歴

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



前回は、ユーラシア人と日本人の死生観の違いについて述べ、それが「人の死の態様」の違いから来ていると説明した。紛争や戦争によって命を落とした「愛する人の死」に際しては、「恨みと復讐」の誓いがあるこそ、人は受け入れることができる。

ところが、自然の気まぐれという飢饉を含む自然災害で愛する者を亡くせば、恨みを抱くこともできなければ、復讐を誓う相手もない。われわれ日本人は、この死をただひたすら運命と受け入れるしかないという絶望的な悲しみに遭遇してきたのであった。

また、このことがユーラシア人に、厳しい戦いに備えて強固に団結するための「命令する強い神」の一神教の発明と受容をもたらしたのだとも説明した。今回は、このこととも関連するのだが、別の説明をしたい。

わが国では、東京は関東大震災で跡形もなく崩れ、江戸の雰囲気を今に伝えることができる場所や建物はわずかしかなかった。阪神淡路大震災を経験した神戸も同様に新しい街に生まれ変わってしまった。

地震が多いために、耐震設計がなかった江戸時代以前には、石材を建築に用いることがなかったこともあって、わが国の多くの木造都市は繰り返し大火災を経験してきた。これ

も「昔が今につながらない街」を作ってきた原因だったのだ。

こうした経験が、平気で建築物を建て替える日本人を生んだのだ。東京でも、この街でも、ビルはまったく様相の異なる建物に変化して行く。明治初期の建築ラッシュを森鷗外は「この国は普請中である」と書いたが、それは明治初期だけのことではない。今も街の景観はどんどん変化して、何年かすると「ここはどこかな」というような風景の変わりぶりなのである。

自然災害や大火災で街は一変してしまうのだから、人間が町並みを変化させることなど、苦でも何でもないので。ところが、これに異を唱える変な学者・・・不勉強な愚か者としか言い様がないが・・・がいるのである。

彼（彼ら）は、「ヨーロッパの人々は街の景観を大切に保持するが、街を簡単に改造して姿を変えてしまうダメな日本人」と言うのである。「日本ダメ論」「日本人ダメ論」を平気で振りかざす愚かな専門家（気取り）がびこっているのには閉口するが、その多くが不勉強ぶりを天下にさらしているだけなのだ。

そうではないのだ。人間が何かしないと変わるものがない街路などの景観を持つ民族は、「変わらないことを大切にする文化」を持つ

たのに対して、地震や火事が何もかも破壊し尽くしてしまう経験を繰り返した民族は、「変わること、変化することを大切に思う文化」を育てたのだ。

変わらないことが大事だなどと考えていても、変わってしまうのだから、いつも嘆き悲しまなければならないことになる。逆に、ヨーロッパなどでは変わってほしいなどと思っていたのなら、苦しい思いばかりしなければならなくなる。

そんなことはイヤに決まっているから、感覚の方向が異なることとなったのである。日本の神社も完成当初は朱色の御殿の風であったのだが、その後の雨・風を受けて風化していき、落成時の色彩を完全に失っていく。

それでも、日本人はあまり塗り替えることをせず、風化して変化して行く様を楽しんでいるのである。中国や韓国の寺などが、いつも当初の色を保とうと色塗りを重ねているとは大きく異なっている。仏像についても同じこと。金色に輝いていた仏像は、やがて金ぴかの輝きを失って行くが、ほとんどの像が金色を復元しないままで、年を経て古びてきた色合いのまま置かれている。

われわれは、時間とともに変わりゆく姿をめめているのだ。「変わりゆくことを大切にしている」のである。これを、われわれの思想としていることは、端的な例で言えば伊勢神宮の式年遷宮で明らかだ。

20年を経過すると神社そのものを新しく作り替えるのである。これは新しくなることで靈力を増す、新しいことは価値あるものである、新しいことは尊いことである、といった思想がわれわれに内在しているからとしか考えようがない。

技術力が途切れないようにするためだ、な

どという解説がなされることがあるが、それなら他に方法があるというものだ。

こう考えてくると、いかに日本人が独特の存在かがよく理解できるのだが、グローバルとか言われる時代には、われわれ日本人の側がこの特別性についてよくよく理解しておかなければ、大損をしてしまうのはわれわれの側だとよくよく自覚しておかなければならない。なんととっても、世界の中では、こちらは圧倒的に少数派なのだ。

ヨーロッパの「人が何かしなければ、街の風景も何も変わらない」という長い年月での経験が、旧約聖書での「万物を支配するために、神は（自らに似せて）人を創造した」という話につながる。

ヨーロッパの感覚では、人は万物を支配するためにこの世に存在するのであり、あらゆる生命の頂点に立ち、あらゆる事物を支配するのである。このように現実の経験が旧約聖書の信仰を支える基となっていることがわかるのだ。

われわれ日本人には、これはなかなか難しい。万物の頂点にいると考えたくても、洪水になると家畜の犬や牛や馬と一緒に流されて行くのだし、地震があれば、彼らとともにガレキの下に埋もれることになるのだ。

ここでは、人間だけが特別の存在だなどという主張は、まったく説得力を持たない。他の動物たちと運命を共有してしまう存在でしかないからである。「他のすべての生き物と人間は同じ地平に立つ」というわれわれ日本人の考えは、極めて普遍的で遺伝学的にも正当であり、素晴らしいものである。これは日本人の誇りとして、世界に発信して行くべき思想である。(続く)